■ 資 料 ■

梅田氏庭園と城福寺庭園について

藤 原 武 二*

by Takeji FUJIWARA*

はじめに

昭和51年12月国の名勝に指定された梅田氏庭園、城福寺庭園について、その概要を報告するものである。指定に先だて、前文化庁企画官吉川需氏のご視察とご指導を仰いだ。また実測調査に際し、梅田氏庭園については県立短大生島田、丸山、加藤、青木諸君の、城福寺庭園については、朝倉氏遺跡調査研究所員吉岡氏の協力を得た。なお掲載の写真は、いずれも所員の小野氏が撮影したものである。末尾ながらご協力いただいた関係各位の皆様へ、あらためてお礼申し上げる次第である。

梅田氏庭園

福井県今立郡池田町谷口にあり、梅田幸夫氏所有である。屋敷は、南側が小高い2段の台地となり東南の持山に続き、北側の約4000㎡は緩傾斜地で三方が塀で囲まれている。この北部の北と南に、東西方向の二条の用水路があり、それらの用水路の間に住宅や庭園が配置されている(図1参照)。

建物の東側に主庭の園池がある。池、滝石組、中島、石橋、沢飛石、飛石、上段奥部の立石組、遺水などによって構成されている。池の地割は、建物に沿ってやや細長くなされている。汀線は、北側で大きく二つに入りこみ、中ほどでわずかにくびれ、西南側ではかなり直線的になっている。護岸の石組は、北側は石も大柄なものが多く、組み方も巧みであるのに反し、西南側は石も小ぶりで、同じような大きさの石が並べられている。中央より、池の最もせまったところに、石橋がかけられている。一石の沢飛石と自然石橋を併用した珍しい構成である。石橋の大きさは、長さ192cm、中央部で幅70cm、厚さ30cmである。池の東北側には滝石組があり、その前方に1.5mほど離れて小さな水分石が配置されている。西北隅には、池にのぞんで一段の石段がつくられている。北西側の汀には大きな礼拝石があり、その対岸は出島状に張り出し先端に巨石が据えられている。梅田家には、

当庭園が、戦国時代の大名朝倉氏の庭師によってつくられたという伝承があるが、石橋から北よりの部分の池の形、汀石の配置、組み方などに、福井市城戸ノ内町の朝倉氏遺跡諏訪館跡庭園に多少類似したところがみられる。

石橋より南側には、多少形が崩れているが、北よりに亀島、南よりに鶴島とおぼしき中島がつくられている。さらにその南に、ほぼ1m間隔に沢飛石がうたれている。亀島の東側に接して、舟石の形態をした岩島が附置されている。亀島の東北側には、滝石組があり、水落石は笠石状に飛び出しており、福井県南条町鶴甘神社庭園や滋賀県米原町青岸寺庭園の滝石組に酷似する。南西側の直線状に組まれた護岸石組の中央に、礼拝石に相当する平石がみられる。前述の礼拝石に比して小さい。この礼拝石や亀島は、福井県今庄町の伊藤氏庭園のものと同形式である。このように石橋より南側の部分には、江戸初期から中期にかけて作庭された庭園にみられる手法が多く使用されており、当初の庭園が住宅の改築などに伴って後世改造された可能性が強い。

建物と池との間は、平坦で飛石が据えられている。書院風の飛石で、大ぶりの石が広い間隔で打たれている。飛石の間隔は、心で平均75cmである。又地盤からの高さは、5~15cmである。建物の雨落溝に接した最初の飛石にはやや扇形のものを、踏分石には大きな平石を用いている。また二石を接して据えた飛石や控石も配置されている。飛石は礼拝石に続くものと、北側に進むものとに分れる。北側に打たれた飛石は、また途中で西と東に分岐する。

池の東側上段奥部には立石組があり、その前方に遺水がひかれている。この庭園の本尊石又は主人守護石といえる中心の立石は、地面からの高さ130cm、左側の添石は高さ54cmほどで、両石の先端の差は70cmである。台座石に相当する前石は、完全な扇形の平石である。これらの石組は、礼拝石附近から眺めると、勝山市平泉寺の旧玄成院庭園上段の石組に似通ったところがみられる。池

* 朝倉氏遺跡調査研究所

圖1 梅田氏庭園

のまわりには、はっきりした廻遊の園路はみられないが周遊コースに沿って据えられたと思われる二石の組合せによる石組が、多くみられる。現在倉のある近くにも遺水がある。この遺水を通して屋敷の外から水を引き、二条の暗渠で二つの滝口上方の導水路に供給している。

建物の西側には、三尊石組と飛石を主体とした平庭がある。三尊石組の地面からの高さは、本尊石が105cm、向って左の添石が46cm、右の添石が89cmである。三尊石組の前面には、天端の平な二石が釣合よく据えられている。飛石の間隔や据え方は、東庭と同様である。

建物の南側の前庭には亀島と鶴島がつくられている。亀島は亀頭石、尾石、脚石などを備え、側面から眺めると、いかにも生きた亀が這っているがごとく、大変写實的に構成された亀石組である。鶴の胴部にあたる中心石は、長さ225cm、幅140cm、高さ160cmの非常に大きな石である。その前部に接して頭石と思われる石が、また側面に離れて羽石を思わせる平石が伏せられている。鶴の巣籠りが連想される、豪華な鶴石組である。

梅田氏庭園は、このように鶴島や亀島、守護石組、扇形の石などを意匠した祝儀の庭・吉祥庭園といえる。また座敷からの観賞を主眼とした庭園である。なお民家の庭園としては規模が雄大であり、当時の勢力の強大さがしのばれる。

庭園樹木は高木にはスギ、モミ、ヒノキ、アカマツ、イロハカエデなどが、低木にはサツキ、ツツジなどが多くみられる。地被類には、蘚苔類や黄蓮が多い。

城福寺庭園

福井県武生市五分市町にあり、浄土真宗出雲路派寺院の庭園である。境内には寛永年間建立の本堂、鐘樓堂、文化文政年間建立の山門、そのほか経蔵、鼓樓、庫裡、茶室などがあり、庫裡の南側に本庭園がある。

庭園は、元禄年間に14代住職一相法師によって造られたと伝えられている。庭園は書院の南側に位置し、杉の生垣により外部と区画され、主要部の広さは約400㎡である(図2参照)。庭全面が、スギゴケなどの蘚苔類でみごとに覆われている。庭園の左方奥部すなわち東南側には、低い築山があり本尊石を中心とした立石、伏石がみられる。またこれらの石組におおいかぶさるように、武生市の天然記念物に指定されている柊の太木が繁っている。築山の裾にも石組が施され、両端には二神石が組まれている。築山の前面すなわち建物側は、水面を象徴するかのよう平坦となる。この平地部に舟島、鶴島、亀島、礼拝石、飛石などが配されている。正面生垣越には、文室山などの日野山系の山並が望まれ、それらを借景としている。形式は築山の枯山水借景庭園であり、用途、内容からは座観式吉祥庭園であるといえる。

つぎに江戸時代の作庭書などを参考にしながら、これ

らの石組について、若干考察を加えてみたい。造庭書が数多く刊行されているが、城福寺庭園の石組や配石には「築山山水伝」、「築山庭造伝前編」、「嵯峨流庭古法秘伝之書」などの記述内容に符合する部分が多い。

築山上の立石1は主人守護石または三尊石の本尊石に平地部の平石2は礼拝石にあたると推定される。「嵯峨流庭古法秘伝之書」に「山水の正面に三尊石有、其前に必、礼拝石有、石に寄て二ツ三ツすへる事有、三尊石の後は山有べし、山なければ木有べし」とある。また本庭の三尊石組は、二石による構成であるが、必ずしも三石を用いなければならないということはなかったらしい。「夢窓流治庭」に「山水役石居所之伝…右三尊石は庭第一の石なるが故に正面中央に立之、尤、一石にても二石にても意同じ、居様随分、根の強く少しも動かざる様に居るを第一とす…」とある。このように庭園の正面に三尊石があり、その前方に礼拝石が配置されることになっているが、本庭園の場合も、書院床の間附近からみた正面に高さ116cmの立石1があり、この石と床の間を結ぶ線上に平石2が位置している。またこの平石を中心にしてほぼ等距離に舟島、鶴島、亀島が配置されている。庭に降りて礼拝観賞するにふさわしい地点を選び、礼拝石を意識的に据えたことがうかがわれる。

築山の両裾、左側には地面からの高さ105cmと20cmの二石、右側には95cmと20cmの二石の、極端に高さの異なる石組が組まれているが、これらは二神石または二王石、二柱石ともいわれる石組と考えられる。「築山庭造伝前編」に「二神石の事、山水の前、両の端に必二神石を立べし、又二王石ともいふ、又二柱石ともいへり、石の形により、二つ三つ副なり、作者の心にしたがふ、二王石に陰陽あり」とある。以上の礼拝石、守護石、二神石は、当時の庭園になくはならない重要な役石であった。

礼拝石の左側には舟島がある。長さ4.3m、幅2.3mでまわりを小石で囲み、舳と鰭を象徴した石が前後に配置されている。蓬萊式庭園では、海洋遙か遠方に神仙島があり、その金銀七宝仙薬を得るための宝舟を意匠した舟石が庭中によく用いられている。本庭園では舟石にかえて舟島とした珍しいものである。またこれに関連して礼拝石は、舟着石を兼用していることも考えられる。礼拝石の東南側には鶴島、西南側には亀島を配置しているが、いずれも小石を多く用いており、鶴の羽石や亀の亀頭石などを如実に表現した石はみられない。

右方の二神石の左側には、岬状に突出して石組が施されているが、大きな平石を用いているところなど、伊藤氏庭園の護岸にも、類似した部分がみられる。築山は、高さ1.3mほどで、ゆるやかな傾斜をもつ。立石1のまわりの土砂が流れ、根石があらわれているから、当初は現在よりも、2~30cm高かったと推察される。

築山の柵は葉張り直径12mほどの巨木で、庭園が造られる前からあったといわれているが、築山上に生育していることからみて、かなり大きな柵を、作庭に際し真木として植栽した可能性が大である。このほかの庭園樹木は、高木としてスギ、スダジイ、シラカン、ツバキ、ヤマモミジ、イロハカエデなどがある。低木には、サツキ、ツツジが多く、きれいに刈込まれている。これは伊

藤氏庭園でも行われていることであるが、庭園の管理は代々御主人が受持ってこられたという。出来るだけ当初の姿を保ち続けるよう努力をされているのである。

庭園の東側には、茶室「雲山亭」が、西側には「一相庵」があるが、いずれも後世につくられたもので、附属の飛石も新しいものである。

図2 城福寺庭園

▲ 梅田氏庭園 東池庭 西から

▲ 梅田氏庭園 東池庭 西南から

▲ 梅田氏庭園 西庭三尊石組

▲ 梅田氏庭園 東池庭上段本尊石と遣水

▲ 梅田氏庭園 南庭亀島

▲ 梅田氏庭園 南庭鶴島

▲ 城福寺庭園 北西から

▲ 城福寺庭園 亀島と二神石

▲ 城福寺庭園 本尊石と築山

▲ 城福寺庭園 東側二神石

▲ 城福寺庭園 舟島